

フィリッピンにおける異装者研究に関わる覚書

牛 島 巖

A Note on the Studies of the Transvestites in the Philippines

Iwao USHIJIMA

After quickly reviewing the sex/gender system of the West and Judith Butler's theory that stress the performative work of gender/sexuality, this note refers Mark Johnson's new ethnography of the transvestites in the Southern Philippines. More recently transexually identified men (*gay/bantut*) have emerged as creative producers of an image of beauty defined in terms of an imagined American otherness. Johnson explore the relation between the collective endowment of gay/bantut as purveyors of beauty and their symbolic valorization as impotent men and unproductive/defiling women.

1 セックス、ジェンダー、セクシュアリティ

私たちは生殖（そして異性愛）を自然なものとし、二元的な性器＝生殖器を基準に男・女という互いに排他的かつ補完的な二つの実体を認識している。この認識は我々が持っているセックス／ジェンダー体系に基づいたものである。この体系は厳格なイデオロギーでもあって、この体系から逸脱した行為は抑制され忌避されてきた。しかし、この体系は近代西洋社会において社会文化的に構築されたものであり、系譜があることも近年のさまざまな研究の中で浮び上がってきている¹⁾。フィリッピンにおける異装者（女装の男性）を対象にした、新しい研究の一端を紹介するに当り、このセックス／ジェンダー体系の系譜と絡んだ、近年のセックス（?）、ジェンダー（性差）、セクシュアリティ（性的指向性行動）に関わる考察を手短かに概観しておく。異なる性的諸文化を取り上げるにあたり、人類学という近代西欧的な学問を背景とする研究者側

が体现している性に対する基本的な考え方を確認しておく必要があるからである。

フェミニズムの試みは、ジェンダーをセックス（染色体的性）から切り離すことに向けられてきた。かつてゲイル・ルービンが「セックス／ジェンダー・システム」²⁾と呼んだ、染色体的性が文化的なジェンダーに変化させられ、ジェンダーとして加工処理されるというシステム、この見取図は、人々の様々な行動や自己同定を染色体上の性に帰すことを最小限に押さえ、一方でそれらを最大限、社会化されたジェンダーという構築物に帰してきた³⁾。

しかし、セックスという用語は、染色体的性をはるかに超えてジェンダーと呼ばれようなものと重複している。英語では、セックスという言葉は、「男性」あるいは「女性」と同じように、ジェンダーを意味することもある。しかも、セックスという言葉は、「セックスをする」というように性行動（セクシュアリティ）、快楽、イン

ターコース、刺激を意味することもある⁴⁾。

たしかに、セクシュアリティとジェンダーとは関連している。とはいえ、同じものではなく、社会的実践に関してはふたつの異なった領域の基礎を形成している。そして、このジェンダーとセクシュアリティは政治的なものであって、他者に罪を与え、抑圧していく一方、人々の活動を報い、奨励する権力のシステムに組み込まれている⁵⁾。

フーコーが19世紀に見出したのは、ヨーロッパ思想において、さまざまな現象が「セクシュアリティ」というカテゴリーの下位区分というかたちで分類されていく多面的な様相であった。とりわけその過程を通して、それまでは、行為に準拠して語られていた同性間の肉体関係（禁止され孤立した性器を巡る行為）が、その準拠点を人格、あるいは、欲望へと移されていった。こうして「同性愛者」というカテゴリー（一つの顔を持った人物であり、一つの種族である）が誕生し、これが人間を分類する一つの原理にまでなっていた。この時期に、この新種の生物、ホモセクシュアルな人間を命名し、説明し、定義しようとする過度な試みがなされたが、その区別せんとする熱狂の中で、さらに新しいカテゴリー、すなわちヘテロセクシュアルな人間というカテゴリーをも生み出した⁶⁾。かくて近代西洋社会は、性的価値観に存在するヒエラルキー制度にしたがって、様々な性行動を弁別していった。その中で結婚していて、生殖を伴う異性愛者が性のピラミットの頂点に君臨する⁷⁾。こうした系譜のなかに生まれた異性愛主義は、権力構造であり、自然で、健康で、正常な異性愛を同性愛の上位において特権化する⁸⁾。

少なくとも世紀の転換期からずっと、同性間の欲望を理解する上では、ジェンダーの比喩が支配的であった。この倒錯の比喩「男性の身体に囚われた女性の魂」は、(多くの生きたゲイ文化

の核心にうちにも)様々な異なる形でコード化され、存続しているし、近代の同性間欲望についての言説においても定番となって居座っている。この比喩を推進する力の核心は、人の同性愛に特殊な説明を加えることにあって、異性愛主義の覇権を保存することである⁹⁾。

ルービンにしたがうと、19世紀の性科学は、ある意味で性的種族の形成という状況を呈している。同性愛は種族化の過程の好例である。同性愛の行動はつねに人類の間に存在してきた。社会や時代が異なれば、推薦されることもあれば、罰せられることもあった。

ニューギニア社会では、例えば、同性愛の活動がすべての男性に強制されている場合である。同性愛行動はまったく男らしいものであると考えられ、その役割は年齢に基づいて決められ、パートナーは親族的な地位によって決定されている。ここでは男性は広範な同性愛的かつ少児愛的な行動を行なうが、それを行なう人たちは同性愛者でも少児愛者でもない¹⁰⁾。この例は、同性愛者という自己同定は、歴史的な構成物であって、超歴史的な本質ではないことを示している。

他方において イヴ・セジウィックが性差（男か女か）と性的指向（同性愛か異性愛か）の差異を強調するのも、近代社会では、性差による自己同定の一部として性的指向による自己同定が組み込まれてしまっているからである。つまり、彼女によれば、性差による自己同定（自分が男か女か）というのは、たいていの人間社会に存在するのだが、性的指向（自分の欲望の対象が同性か異性か）が個人の自己同定の構成要素になっていることは、普通はない。ところが、私たちの社会では、自分の欲望の対象が誰かということが、自分は誰であるかということの重要な要素となってしまっている。しかも、性差による自己同定と混同される。そのため、例えば、女を

欲望の対象とするということが自分は男であるという自己同定をもつことに、必然的に付随するものと考えられてしまう。そうセジウィックは主張する。そうして区別した上で、性差における女性の抑圧と性的指向における抑圧（ホモフォビア：同性愛と同性愛者に対する嫌悪感、同性愛者に天罰を与えたり、治療してやろうという欲望）との関係を考えなければならないと主張する¹¹⁾。

私たちの社会の現況はジェンダー要因よりも、むしろ制度化された異性愛に基づくものであり、ジェンダーそのものが異性愛と根本的に結びついている。この意味でジェンダーはヘテロ・ジェンダーと同意であり、こう命名することで、異性愛とジェンダーの関係が明確となる¹²⁾。この異性愛に基づく規範（理想的な形式としての異性愛、男らしさや女らしさに関する理想や規則など）のはたらきかけの一側面は、先に触れたジェンダー（性差）とセクシュアリティ（性的指向）の混同である。そうして自然化されたジェンダー秩序に反する同性愛を歪める手法として、レスビアンやゲイというステレオタイプを積極的に生産する。当然、女性性を遂行する男性はゲイであるという信念は、同性愛嫌悪の上に成り立っている心情である¹³⁾。こうしたジェンダーを取り締まり、恥じ入らせる支配的な異性愛主義にも系譜があることが明示されてきた。

ところで、同性愛者が擬似エスニック的で、集団化し、性的に構成された共同体として成立していったのは、ある程度は産業化によって育成された人々が移動をはたした結果である。それ以前の農村では同性愛を欲望する者は攻撃にさらされており、孤立した状況であった¹⁴⁾。20世紀後半において、多くの女と男たちは、自分たちをレスビアン・ゲイとよび、自分たちに似た女や男たちからなる共同体の一員だと自覚し、同性愛者という自己同定を基礎においた政治的

組織化をおこなうようになった。これを可能にしたのは、資本主義の歴史的発達である。人々が自分の生活を相互依存的な家族の一部であることによって作り上げる代わりに賃労働を通して作り上げ始めるときにしか、同性愛の欲望は個人の自己同定——異性愛の家族の外で生き、個人生活を同性への性的関心を基に築いて行く力による自己同定——に結晶しえなかった¹⁵⁾。レスビアンとゲイ男性の自己同定と共同体は歴史的につくられたものであり、多くの世代に及ぶ資本主義の発展の結果である。したがって、こうした過程が浅い伝統社会におけるセックス・ジェンダー秩序は、西洋近代に支配的な言説とは単純に等価物をもたない概念化が存在しているとみななければなるまい。

II ジェンダーの行為遂行性（パフォーマンスィヴィティ）

このように近年のジェンダー研究には、生物学的なセックス及び文化に基づくジェンダーを区分し、セクシュアリティそのものの系譜を検討する傾向がみられる。その一貫としてジュディス・バトラーが論じるジェンダーを行為遂行的に捉える研究が広範囲に適用されている¹⁶⁾。たしかにジェンダーとセックスの区分は、解剖学的・生物学的な性差に縛られないジェンダー・アイデンティティが可能であるという認識を開いた点で大きな成果であったといえよう。バトラーはさらに一步すすめて、ジェンダーとセックスの二分法そのものに疑問を抱く。それは、この二分法を作動させているものこそ、近代主体の思考にほかならないからである¹⁷⁾。

バトラーは「身体」を意味づけられるのを待っている（つまり意味付け以前にあると想定される）「受け身の媒体」として捉える立場を疑問に付す¹⁸⁾。身体は「男・女」であるのではなく「男・女」として居続ける行為を繰り返すのだと主張

する。つまり、ジェンダーは遂行、行為の繰り返しによって成立する、しかもこの行為遂行は規定された枠組のなかで行われているという。「ジェンダーとは、身体をくりかえし様式化していくことであり、きわめて厳格な規則的枠組になかで繰り返される一連の行為であって、その行為は、長い年月の間に凝固して、実体とか自然な存在という見せかけをうみだしていく」¹⁹⁾。そして、それはなかば強制的な反復・引用である。バトラーは、「ほとんどいつも異性愛結合の理想化と関連する特定の女らしさや男らしさの理想を肉体化することが必要とされることによりジェンダー規範は作用する」と述べ²⁰⁾、「女の子」といわれたものは、「生存できる主体として資格を得、存続していくためには規範を「引用」するように強いられる。従って、女性性は、選択の結果ではなく、規範の強制的な引用、つまり複雑な歴史性が規範、規律、処罰の諸関係から切り離しできないような規範の引用なのである」とする²¹⁾。

バトラーは主体の代わりに、行為体という概念を使うのは、主体という言葉がうばってきた行為の可能性をさぐるためである²²⁾。そのうえで「ジェンダーは一種の〈なること〉——つまり営為——であって」、不断の反復行為、引用行為であるとみるのである²³⁾。かくて支配的な異性愛の性的指向は、男らしさ、女らしさ、正常なセクシュアリティについての空想化された理想を模倣しようとする常に反復される試みということになる。こうした強制的異性愛の系譜の練り上げが、バトラーの業績である。そして、ジェンダーの実体的効果が、ジェンダーの首尾一貫性を規定する実践によって、パフォーマンスィヴィ（行為遂行的）にうみだされ、強要されているとし、ジェンダーとは行為遂行的であると一貫して主張する。バトラーのように、行為遂行性としてジェンダーをとらえると結果的に

ジェンダーは特定・単数から不特定・複数なものへ広がる可能性がうまれてくる²⁴⁾。

さらにこの理論に従えば、ジェンダーとは、遂行され、身体化された行為である。ジェンダーの行為遂行性は「個別の行為ではなく、反復や儀礼であって、そのような行動は、身体という文脈のなかでその行為を自然化することによって効果がえられるもの」²⁵⁾である。だから「ジェンダーは身振りや動作、歩き方を通じて、深部にある内面性という幻想を肌の上に演出する」²⁶⁾のである²⁷⁾。

かくて、バトラーにおいては、身体は自己同定に根拠をあたえる本質ではない。セックス(性別)とは実はジェンダーに先行するものではなく、自然なものとして構築されたもうひとつのジェンダーである。そのセックスの規範は、男女の間で異なった性的欲望が存在していることの証拠として理解され、異性愛の首尾一貫性を成り立たせている。バトラーが問題にしているのは、あるものが社会構築されたものか、本質的なものかということではなく、社会構築的なものがいかに本質的なものにすりかわる（そしてジェンダーが行為遂行的であることを隠蔽する）のかということへの探求でもある。

III マーク・ジョンソンが描く南フィリッピン の異装者

多くのアジア諸国では性的流動性に対する自然な寛容を表出しており、トランスジェンダーの男性が広く容認されている。フィリッピンでも同性愛者や異装者の人々への寛容の伝統を保持している。彼らは容認されており、多くは(売買春を含む)裁縫師、理容師、美容師などの個人的サービスの供給者として、周辺的ではあるが社会的地位を獲得している。フィリッピンでは地域の高官がバクラ(タガログ語：女っぽい女装の男性)のファッションショーに参加すること

もある。フィリピンのババイラン（女装の呪医）やバクラが持っているようにおもわれるのは、西洋社会の支配的な言語や社会的編成とは単純な等価物を持たないセックス・ジェンダー秩序の概念である。しかし60年代の終わり頃から旧来の体系のうえに新しいゲイという自己同定が重ねられてくる動きがみられる。そこでゲイとしての自己同定を採用するフィリピン人は明らかに西洋の例を意識し、ある部分においては西洋の例から方向づけられている²⁸⁾。

フィリピンの異装者（正確には女装する男性）を単にある範疇に分類するのではなく、彼／彼女たちの行為遂行性に注目して記述された近年の二つの民族誌が注目できる。それはピコール州で調査したカネルの報告と²⁹⁾、以下に紹介するフィリピン南部のイスラム圏の一郭をなすホロ島において女装する男たちを調査研究した人類学者マーク・ジョンソンによる民族誌である³⁰⁾。以下その要点をまとめておく。

ここでは自ら女性であると自己同定している女装の男性たちは一般にバンツツ (*bantut*: タガログ語では一般的にバクラ) と呼ばれるが、彼女たち(彼らはジェンダーとしては女性であると自己同定している)自身はゲイと自称することを好む。ここではジョンソンにしたがい、ゲイ／バンツツと表記して進める。近年、彼女たちは美のイメージの創作者として美容業界に幅広く進出しはじめた。彼女たちへの評価は両義的である。地球規模の美・スタイルを媒介・調達する才能が評価されている一方、象徴的には不能な男、産めない・汚れた女と設定されている。

1960年代までホロ市では女装の男たちは平凡な低い地位にあまんでいたが、この20年間に美容院を経営し、しばしば女性の美人コンテストの組織にも係わり、他方ゲイ美人コンテストを自ら主催する者が増加している。近年におい

て美容院が増加し、ゲイ／バンツツたちが美とスタイルの創作者として輩出していくことが許されている背景に、フィリピン社会には、ジェンダーや性的指向を逸脱する者に対する寛容な伝統があることをみることができる。慣例的にもバンツツたち(女っぽい女装の男性)は、すぐれた音楽家、歌手、踊り手であって、結婚式や儀式に招かれ村々を訪れていた。女装美人コンテストの隆盛も、こうした旧来の慣行の新しい表現ともいえる。

ゲイ／バンツツたちが主催する女装美人コンテスト大会は、町村の公の施設で催され、町村の高官や夫人達が招かれ、あるいは協賛に加わり、国際大会の形をとる。彼女たちは、例えばミス・チェコスロバキヤなどに扮して登場する。つまりゲイ／バンツツたちは地球規模の他者を体現する者として登場する。このように彼女たちは、美とスタイルを体現する者であるが、同時に変態で卑猥な存在でもある。この支配的な言説では、バンツツは性的に不能な男であり虚偽の女であるだけでなく、文化的な他者、アメリカ・スタイルに自己同定した変態であると否定的に規定される。これには説明がある。

さて、フィリピンでは女っぽい女装の男性の性的指向は慣例的には標示されてはいなかった。彼らを倒錯した同性愛者と呼ぶ言説は古いものではない。フィリピンの伝統文化においては同性愛者・異性愛者の区別は欠落していた。ゲイ／バンツツたちは性的に女であると自己同定し「真の男」を性のパートナーとする。ここではジェンダーの決め手の一つは同性・異性を相手にするかどうか(女性器か肛門か)ではなく、性交時の姿勢が基準となる。挿入する者なのか挿入される者なのかが、男性あるいは女性の自己同定に重要である。「真の男」の性的指向は、異性が相手であれ同性が相手であれ、挿入行動にある³¹⁾。ゲイ／バンツツを相手に肛門性

交をしても挿入する側である限り、「真の男」としての尊厳がおかされることはない。逆に女として自己同定するゲイ/バンツツたちの性的指向は、「真の男」から挿入されることにある。支配的な言説でもバンツツたちは性的に不能で、同性間の性交では挿入される者とされる。したがって、ゲイ/バンツツ同士の肛門性交は近親相姦に喩えられ、ボーイフレンドに挿入することは相手を女にしてしまう行動と見なされる。両刃の剣に喩えられる挿入し挿入される両性愛者は、ジェンダーを混乱させる存在として嫌悪されている。かくてゲイ/バンツツたちの性的指向はヘテロ・ジェンダーと呼ぶこともできよう。

ところで、フィリッピン南部のイスラム圏では、「真の男」と語られるのは、性的には挿入行動者であり、イスラムを守護することで実現される戦士であることである。これは割礼儀礼とイスラムの知力の獲得を行為遂行することで体现される。これに対して女性は文化的伝統性を体现する存在とみなされる。この文化的脈絡において、ゲイ/バンツツは真の男でも真の女でもないと思なされるのが理解できる。加えてバンツツという言葉は異装や美と関連すると同時に、卑猥で性的に是認されないという意味が内包されているので、女性的な存在であると自己同定するゲイたちは、バンツツと呼ばれることを好まないのである。

ゲイ/バンツツたち自身の言説においては、ゲイは、男の身体内部に突き刺さった女の心を持った者、とされる。この言説はゲイとしての自己同定を組み立てるトランスジェンダーの成句である。他方において美の言説と実践はゲイ/バンツツたちが女性性を自己表現する中核である。かくてゲイたちは女装し化粧して、男との性交時に貫かれる側にある「女と同様のもの」であると自身をみなすのである。通常、性

的指向がゲイとしての一義的な自己同定に関連すると語られることは少ないが、多くのゲイ/バンツツたちは肛門性交で初めて貫かれた経験が「真のゲイ」への移行のきっかけの一部であったと語る。

他方、支配的な言説では、彼女たちのペニスは柔らかく、挿入できない性的に不能であるとされる。ここで注目されるのは、支配的な言説においては、彼女たちを、結婚できる姉妹や子供を産む母ではないと位置づけるというより、容認できないおぞましい女であり、性的に不能な男、と思なされていることである。かくてゲイ達が進出した美容院は、彼女たちと同様に美の空間であり、同時に卑猥な空間としても認識される両義的な空間である。だが、こうした明白なジェンダーないし性的な人種に範疇化されるのはこの20ないし30年間のことで、バンツツという言葉は60年代までは種々の脈絡における行動の性格に応じて使われていたにすぎない。

ゲイ/バンツツたちは種族的に変態であるとする言説に内包される局面の一部は、彼女たちの生活の指標が想像されるアメリカを指向していることと関連する。美の調達者としてのゲイ/バンツツたちは美容院の経営に留まらない。例えば結婚式に呼ばれた彼女たちは、美容と化粧の専門家に留まらず、服装から装飾までの技術的アドバイザーとして仕事を請け負う。こうした意味では、彼女たちは、ローカルな伝統と感覚を地球規模に再翻訳ないし再表現する才能がある、と評価されている。このスタイルと美の創作に内包され、彼女たちが体现している内容は、想像されたアメリカ・スタイルの美である。つまり想像された世界的規模の他者の体现であって、これをアメリカの知力(教育、美、そしてスタイル)と名づければ、これと対置され対立するのがイスラムの知力といえよう。ゲイ/バンツツたちが消失した男性性、彼女たちには

是認されない女性性はイスラムの知力と係わるものである。これに対して、ゲイ／パンツツたちが、ゲイ美人コンテストなどで過剰に露出するものは想像されたアメリカ的他者に他ならない。

ここでゲイとして自己同定を獲得するにいたる過程を、彼女たちに生活史から探ってみると、ゲイであることのめざめは高校ないし大学時代にある。この時から「真のゲイ」への変身が指向される。女装への熱中、女っぽい姿勢・振る舞いの遂行、女友達との交際、美容院界限への出入り、美人コンテストへの参加、そして「真の男」との恋愛である。こうした女性としての自己同定への投資は、行為遂行的に継続される。あれこれの女性的なものを取り入れ体現することは歓喜あり、自己変身の持つ力である。

この「ゲイである」ことへの指向で重要なことは、身体の動き・姿勢を柔らかくし、常に自己の美を意識化し、ゲイ美人コンテストで発露されるような魅惑とスタイルを身体化していくことである。その美と魅惑の行為遂行的に取りこんで身体化することを *maarte* という。これは、雑誌、映画、あるいは富をもつエリート達の言説などから引き出されたアメリカ・スタイルの美と魅惑の取り込みを意味する。このアメリカ・スタイルの美・魅惑は想像されたものであって、ローカルなイスラムの伝統から引き出されるものではない。ゲイたちはこのアメリカ・スタイルの美・魅惑を行為遂行的に体現していく。それは、ゲイとしてしぐさ・振る舞いをしなやかなものにしていき、他のゲイたちの外観や魅惑に同化していく一連の身体的同一化である。このように美はまずもって身体行為として理解され、女性性と設定される身体的なしぐさ・振る舞いを自然なものとして一枚一枚繰り返し遂行して体現していく。こうした美とスタイルに関連して *singud* という概念がある。

この語は「模倣」と約されるが、この脈絡においては単なる模倣ではなく、積極的に獲得する過程をしめす。映画やテレビ番組の会話、発話のスタイルを獲得することである。つまり、ゲイであることを発露することは、アメリカと関連する美とスタイルのイメージの占有を通して得られる女性の能力を繰り返し遂行し流用することを意味する。

それだけではなく、彼らが想像するアメリカなるものには、女性であると自己同定するゲイと「真の男」の間で本物の恋愛関係が実現されている空間としてのアメリカが内包されている。ゲイたちの言説においては、この国では現実には実現されない、この種の真の恋愛関係がアメリカという他者の空間では実現されていると想像されている。

この局面に関して、ピコール州（タガログ圏）において、ジョンソンよりやや早い時期にバクラたちの指向に言及したカネルも同様な指摘をしている。バクラたちが遂行していることは、アメリカ文化の模倣である。だが、フィリピンにおける模倣は特別な意味があることに留意しなければならない。アメリカのイメージは力、富、清潔、美、魅惑、享楽の空間であって、こうした想像された外界は力、富の源泉とみられ、アメリカ的な財物、身振り、言葉は象徴資本と連関している。ゲイ美人コンテストにおける演技にみられる、アメリカ、スタイルの模倣は、自己変革を通じた想像されたアメリカ世界の力への接近でもある。そして彼らの美が意味するのは、想像されたアメリカと関連する魅惑のだ。この意味でバクラたちのコンテストは「外部のもの」を集め、自分のものにする過程に依拠した自己変革として見ることができる³²⁾。

パンツツは美、魅惑、アメリカスタイルの創

造的な調達において才能があるとみとめられているが、彼女たちは女である、いや美的にも、性的にも女以上のものと見なされるがゆえに、容認されない。このゲイ／バンツツたちが破廉恥であるとされる背景は、彼女たちの文化的他者性の露出、それも過剰な露出である。ゲイ美人コンテストにおいて彼女たちが体現しているとされる感性は前述したように *maarte* と呼ばれるが、これはスタイル、流行、美、魅惑に関わる感性である反面、気障、見栄、下品、露出過剰といった感覚も内包されている。素朴、上品とは対立する感性である。彼女たちの美の創造性が評価される反面、その過剰な露出性のゆえに容認できない女性とされるのである。近年では、この批判を乗り越えて一部のゲイの中には意識的にシンプルスタイルを指向するものが現れ始めている。

かくてゲイたちは美とスタイルの調達者と一般に認められているが、それはアメリカなるもの、基本的にアメリカに代表される世界的規模の他者性を過剰に露出するゆえにバンツツ（不能な男で産めない・汚れた女）に変身すると見なされる。したがって、ゲイにとってアメリカなるものは自己変革の源泉であり、真の恋愛関係を築く概念的空間であるが、支配的な言説が彼女たちを性的にも種族的にも変態である（真のモスリムの男でも女でもない）として設定するの、まさにアメリカという同じ標印なのである。

かくて、境界上に生きるゲイ／バンツツたちは、産めない女として慣例的な女性像から完全に自由な者であり、文化的他者性の体現を露出して生活するが、他方、共同体に完全に受け入れられることはない。

IV おわりに

女装のゲイ／バンツツたちは身体をくりかえし様式化する行為遂行をとおして女性として自

己同定を獲得している。異装の演技は、演じる人の染色体的性と、演じられているジェンダーの区分をまたいでなされるものであるだけでなく、異性愛の枠組の外にジェンダーを配置する可能性を増殖させる、とよめる³³⁾。

ジェンダーは行為遂行性であるという見方からすれば、ジェンダーは営為（普段の反復行為）であって、すでに社会的に確立されている意味の再演であり再経験、つまり異性愛の理想を模倣するという常に反復される試みである。この意味で、「ジェンダーによる自己同定は、それ自体ドラッグであり、模倣である」³⁴⁾。この立場からみると、ゲイ／バンツツなどのトランスジェンダーの異装者は、ウエストーンが指摘したように二重の模倣、模倣の模倣である³⁵⁾。だがゲイ／バンツツたちは単に女性性を模倣するだけでなく、女性性を超えて、地球規模の他者、想像されるアメリカの美・スタイル・魅惑の模倣を通して、自己変身の力を獲得している。こうして異装の表象を通して、彼女たちは周辺的女性以上の女性になる、とよめる。

一方、「女と同様なもの」と自己同定するゲイ／バンツツたちの性的指向はヘテロ・ジェンダーと呼べるものであって、（ゲイ／バンツツたちを相手にする男は挿入者である限り男性という自己同定は混乱しないという）フィリッピン的脈絡における男女の性的指向に適応したのもでもある。この意味では、ジェンダーの二分化を支持し再確認している、ともよめる。このことは女の性的指向はいわゆる「女」の身体からだけ導きだされる必要はないことを意味するのだろうか。

注

- 1) エリントンには生殖を重要視する異性愛の制度に関して、身体を外性器＝生殖器を基準に相互に排他的な完全なセックスの範疇に

- 分ける近代西欧社会で構築された性意識を Sex と呼び、身体の特長全般をしめす sex とを区別している。そして異なった文化それぞれが sex から構築するものがジェンダーシステムとし、Sex は欧米のジェンダーシステムであると指摘している。Errington S. 1990 Recasting sex, gender, and power : a theoretical and regional overview. In *Power and Difference : Gender in Island Southeast Asia*, eds. Atkinson J. M & Errington S, pp. 1-58. なを 宇田川妙子 1997 「セクシュアリティの人類学の可能性」『個からする社会展望』岩波講座文化人類学第4巻 255-286頁を参照。
- 2) Rubin G. 1975 The Traffic in Women : Notes on the 'Political Economy' of Sex. In *Toward an Anthropology of Women*, ed. R. Reiter, pp. 157-210.
 - 3) イブ・コゾフスキー・セジウィック 1999『クローゼットの認識論』外岡尚美訳 青土社 42頁
 - 4) ゲイル・ルービン 1997 「性を考える」河口和也訳『現代思想 総特集 レスビアン／ゲイ・スタディーズ』25巻6号 青土社 132頁
 - 5) この場合の権力とは、さまざまな実践の絡まりあいのことである。田崎英明 1997「セックスの何が問題なのか」『現代思想』25巻6号 青土社 310頁
 - 6) ミシェル・フーコー 1987『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳 新潮社。セジウィック 1999 前掲10-51頁及び田崎 1997 前掲309-310頁参照。
 - 7) ルービン 1997 前掲105頁
 - 8) マーク・プレシアス 1997 「レスビアンとゲイの生存のエートス」村山敏勝訳『現代思想』25巻6号 青土社 220頁
 - 9) セジウィック 1999 前掲123頁
 - 10) ルービン 1997 前掲111-112頁
 - 11) 田崎 1997 前掲311-312頁及びセジウィック 1999 前掲9-34頁。このような近代社会と主体の構成原理としてホモフォビアを重視する見方は、もともとは、アドリエヌ・リッチの「強制的異性愛」の概念まで溯るといふ(マーク・プレシアス 1997 前掲220頁)。
 - 12) クレア・マリア 2000 「言葉の罫のネゴシエーション」『現代思想 特集ジュディス・バトラー—ジェンダー・トラブル以降』青土社 第28巻14号 224頁の注(6)より。
 - 13) クレア・マリア 2000 前掲214頁およびジュディス・バトラー 1997 「批判的にクイア」クレア・マリア訳『現代思想』25巻6号 青土社 170頁
 - 14) ルービン 1997 前掲214頁
 - 15) ジェン・デミリオ 1997 「資本主義とゲイ・アイデンティティ」風間考訳『現代思想』25巻6号 青土社 150頁
 - 16) ジュディス・バトラー 1999 『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳 青土社(原著は Judith Butler 1990 *Gender Trouble* Routledge)。バトラーの議論に関しては、前掲の雑誌『現代思想』(青土社)第25巻6号(1997)および第28巻14号(2000)に寄せられた各論考に基本的議論と問題点がまとめられている。なを、この分野における人類学的情況に関しては、Rosalind C. Morris 1955 All Made Up : Performance Theory and New Anthropology of Sex and Gender, *Annual Review of Anthropology* 24 : 567-92 が参考になる。ゲイ・レスビアンに関わる動向は、Kath Weston 1993 *Lesbian/Gay Studies in the House of Anthropol-*

- ogy, *Annual Review of Anthropology* 22: 339-67にまとめられている。
- 17) つまり、セックスを生物学的・身体的な規定とし、ジェンダーを社会的・文化的に構築されたとみると、自然と文化、身体と精神という二元論に陥る。大貫敦子 2000「名付け／パフォーマンスィヴィティ／パフォーマンス」『現代思想』青土社 第28巻14号 164-165頁
- 18) バトラー 1997の訳者竹村和子の解説によると、ひとはまず人間として生まれてきて、適切な時期に女という文化の刷り込みを受けるのではなく、身体が人間の身体として資格づけられるのは、これが男の子か女の子かという問いに答えられるときである。現在の霸権的な言説では、ひとはくつねにすでに>ジェンダーであり、ひとの身体はくつねにすでに>性別化されている。男の身体／女の身体という二分法で説明される身体は、それ以降にそこに書き込まれると理解されている文化が、遡及的にそれ自身を反映して構築したものの、いわば文化そのものである（訳者解説 287頁）。なお大貫敦子 2000 165頁参照。
- 19) バトラー 1999 前掲72頁
- 20) バトラー 1997 前掲165頁
- 21) バトラー 1997 前掲166頁
- 22) バトラー 1999を訳した竹村和子は agency に行為体という卓越した訳語をあてている。
- 23) バトラー 1997 前掲201頁
- 24) しかし、行為遂行性は主体自体が場面ごとに自由に変えられるものではなく、場面ごとに要求されるものであり、文脈の必要性に応じて発せられるものである。クレア・マリア バトラー 1997 前掲 解題176頁
- 25) ジュディス・バトラー 2000「『ジェンダー・トラブル』序文 (1999)」高橋愛訳『現代思想』青土社 第28巻14号72頁
- 26) ハリエット・マリノウイツ 1997「クイア・セオリー：誰のセオリー？」三村千恵子訳『現代思想』25巻6号 青土社 209頁から引用。
- 27) この行為遂行性の儀礼的局面についての概念は、ブルデューの著作における習性の概念と結び付けられるものである。ブルデューの再生産の鍵概念は、ハビトゥスである。それは慣習行動に一定の方向を与える意識的または無意識的な習得された一定の性向パターンであり、ときに、知覚に埋め込まれ、身体化されている。男女の身体的振る舞いもハビトゥスである。
- 28) デニス・アルトマン 1997「世界的なまなざし・全域化するゲイ」松村竜也訳『現代思想』25巻6号 青土社 286-308頁
- 29) Fenella Cannel 1995 *The Power of Appearance: Beauty, Mimicry, and Transformation in Bicol*. In V. Rafael ed. *Discrepant Histories: Translocal Essays on Filipino Cultures*, Manila, Anvil Publishing, pp. 223-258. 1999 *Power and Intimacy in the Christian Philippines*. Cambridge University Press. とくに Part IV: Beauty Contests pp. 201-226.
- 30) Mark Johnson 1997 *Beauty and Power: Transgendering and Cultural Formation in the Southern Philippines*. Oxford, Berg.
- 31) メキシコでも男たちは女とも男ともセックスするが、彼らはゲイであると考えていない。自己同定は性の対象が基準ではなく、*activo* (挿入者) か *pasivo* (挿入される者) かが基準である。Weston 1993: 356.
- 32) Cannel 1995: 223-229.

- 33) バトラーは、異装をジェンダーそのものが行為遂行的であることを暴露し、支配的なセックス・ジェンダー体系の内部に攪乱を起こすものであるという。こうしたドラッグは現実が一般に想定されているほど固定したものでないことを立証する例であると位置づけている。バトラーを引用すれば、
「ひとが、固定していてなじみにある文化認識をおこなえない瞬間——ひとが自分の見ている身体を確信を持って読み取ることができない瞬間（ドラッグ）——はまさに、もはやひとには自分が遭遇した身体が男のものか女のものであるか確信できない瞬間である。……そしてこのようなときに、わたしたちは自分たちが「現実」だとみなすもの、ジェンダーという自然化した知識として引合いにだすものが、じつのところ、変更も修正も可能な現実なのだと理解するようになるのだ。これを転覆的と呼ぶか、何か別の呼称を与えるかしかない」バトラー 2000 前掲78頁
- 34) 大貫敦子 2000 前掲169頁より引用 「支配的な異性愛のセクシュアリティそのものが、みずからの理想化を摸倣するという常に反復される試みなのである」
- 35) Weston 1993 : 353